

講評

新聞で育む「未来を歩む力」



茨城県新聞教育研究会長 水戸市立内原小学校長 折本 正巳

第13回新聞感想文コンクールは、応募作品数3521点で、3年連続で3500点を超えました。全体を通して印象的だったことは、様々な分野の記事が取り上げられていたこと、感想だけでなく、自分ならどうするかを考えたり、社会全体が目指す方向について提言したりしているものが多かったこと、記事について他者と意見交換をすることで、見方・考

え方・感じ方を広めたり深めたりしている様子が感じられたことです。部門ごとに見てみると、小学校1~3年の部は、純粋な感性で記事をとらえ、自分の考えをしっかりとつづけていました。記事を通して、教科書だけでは気づきにくい社会の出来事に興味をいだくようになったことも伝わりました。小学校4~6年の部は、自分の

体験や知識を想起しながら記事を読み進めていました。記事をもとに新たな追究をしているものもありました。記事について周りの人と話し合い、世界観を広げている様子もうかがえました。中学生の部は、記事の内容を他の出来事やこれまでに学習したことと、比較したり関連付けたりして思考することが上手になっていました。自分のこれからの生き方や社会の在り方について述べ

ているものも多数ありました。高校生の部は、選択する記事が様々な分野へと広がるとともに、私たちの生活において切実な問題を取り上げていました。社会人として実社会に出る自分、主権者としての自分が、今後どのように行動すべきか真剣に考えている点が素晴らしいと感じました。新聞感想文にチャレンジすることは、次のような学習を行うということでもあります。

(1)記事を選ぶことを通して、広く社会に目を向ける。(2)記事を読むことで、社会の出来事を理解するとともに、記事に登場する人や記事を書いた新聞記者の、生き方・考え方を知る。(3)記事について、あれこれ思いを巡らせ自己内対話を活性化したり、他者と意見交換したりして、自分の考えを明確にする。(4)自分の思いや願い、主張を他者に伝えるように表現する。時には

誰かと感想文をもとに語り合う。これからの時代は知識や技能をより多く習得すればよいという時代ではありません。玉石混交の情報の中から必要なものを選択し、正しく理解し、考えを深め、仲間と協働していくことが求められます。児童・生徒の皆さんには、新聞を通して、未来を力強く歩むために必要な力を身につけてほしいと思います。

茨城県知事賞

すごいなし事体けん



筑西市立開城西小3年 須藤 美里

「学校のそうじをしているののかな。」 わたしと同じくらいの子が、まどをふいている。写し目が目に入りました。でも、記事を読んでみると、し事体けんで定食やさんの開店じゅんぴのお手つだいをしているところだと

わたくしがすごいなあと思ったのは、し事体けんに行く前に、そのし事の内よきをきちんと学習しているところなんです。どのようなし事をするのか、お店の中にはどんなものがあるのか、気をつけなくてはならないことなど、いろいろなことをべん強しているのだと思

元気に仕事体験



手作りの衣裳披露 茨城県新聞教育研究会主催の「元気に仕事体験」に参加した筑西市立開城西小3年の須藤美里さん(左)が、手作りの衣裳を披露している様子。

「元気に仕事体験」に参加した筑西市立開城西小3年の須藤美里さん(左)が、手作りの衣裳を披露している様子。

小学校4~6年生の部

希少アユの絶滅防げ!



つくば市立竹園西小5年 水口 友裕

最近、SDGsという言葉をよく聞きます。そこで、夏休みの統計グラフのテーマにしようと思い、学校でアンケートをしました。すると、多くの学校の5年生は、「海の豊かさを守ろう」と「陸の豊かさを守ろう」の二つの目標に関心を持っている人が多いと分かりました。自然を大切に共

生していきたいと考える人が多いという事です。でも、ぼくには、共生とはどういうことか、どうしたら共生できるのか、考えてもよく分かりませんでした。そんな時、新聞で「希少アユの絶滅防げ!」という記事を見つけた。そこには、奄美大島の小学生が

「ドナー不足解消見えず。」その大きな見出しと意思表示を呼びかける人々の真剣な眼差しは私の心を締め付けた。そこには臓器移植法の施行から二十五年が経った今でもなお残り続けるドナー不足の現状が記されていた。この記事を初めて読んだとき、私の脳裏に浮かんだのは中学三年生の頃の記憶だった。現代社会の授業中、先生は私達に「もし自分が脳死判定を受けたら臓器提供をしたか」と問いかけた。生徒は様々な意見を伝え合っていたが、その中で私は明確な意思を持っていない。ゆっくり考えて自分の意思で臓器提供の意思表示をするかどうか選択

小学校1~3年生の部

中学生の部

令和の日本に求められる「マインド」



県立古河中等教育学校3年次 金谷 梨央

「日本を救う!令和のギャル」汚職や円安、ロシアによるウクライナ侵攻や新型コロナウイルス関連の明るい内容ではない記事が紙面に並ぶ中、このパンチの効いた見出しは「実際の目を見たい。」 見出しを見たとき、私の知らないうちに日本のギャルは戦隊モノなどのヒーローにでもなったのかと驚いた。記事を読んでいくと、「日本を救う」というのは物理的にはなく、「マインド」つまり考え方でのことだった。 「ギャルマインド」、前向きで、意志が強く、自己肯定感が高い。このことを知り、確かにこの「マインド」は重要

だと思った。 私には自分と他人を比較してしまう癖がある。「あの子の方が勉強ができる」「あの人は私と比べるまでもない程にいろいろな事ができる」などと、他人と比較するたびに、ネガティブな思考になってしまっている。 しかし、この記事はこのような私の考え方を一変させてくれた。「生きていくだけで偉い」という言葉のように前向きな「ギャルマインド」。この考え方が私に必要なものだと思われ、絶対的なアイコンが不在な「令和のギャル」は多様化を

してあり、だからこそ前向きに自分の信念を貫き通す「ギャルマインド」が注目されている。 昨今の社会では「多様化」が重視され、求められている。多様化の一端を辿る現代社会において重要な、「相手を確認、自らも信念をもつ」ことは、まさしく「ギャルマインド」そのものだろう。 さらに驚くべきことも記事には書かれていた。なんと、この「ギャルマインド」は企業に導入されていたのだ。「ギャルマインド」と言い、会議の場において社員がギャルになりきり、「敬語禁止」「あだ名で呼ぶ」などのルールで村度なしで意見を交わすことで素直でユニークなアイデアが生まれるらしい。異なる年代の社員の「壁」を崩しているのはギャルマインドである。恐るべし、ギャルマインド。

高校生の部

誰かを救う可能性



県立古河中等教育学校5年次 永塚 梢

「ドナー不足解消見えず。」その大きな見出しと意思表示を呼びかける人々の真剣な眼差しは私の心を締め付けた。そこには臓器移植法の施行から二十五年が経った今でもなお残り続けるドナー不足の現状が記されていた。この記事を初めて読んだとき、私の脳裏に浮かんだのは中学三年生の頃の記憶だった。現代社会の授業中、先生は私達に「もし自分が脳死判定を受けたら臓器提供をしたか」と問いかけた。生徒は様々な意見を伝え合っていたが、その中で私は明確な意思を持っていない。ゆっくり考えて自分の意思で臓器提供の意思表示をするかどうか選択

欄がある。大人は免許証などを持ち歩くことが多いが、その一方で免許のない子供は大人に比べて意思表示の手段が少ないように感じる。法の改正で十五歳未満の子供もドナーの対象となったため、意思表示のしやすさにおける差は最小限に抑えるべきだ。そこで、政府が全世代にマイナンバーのカード化と意思の記入を推奨し、広告などで発信したら良いと思う。さらに意思表示方法を調べていたら、身分証明書の記入だけでなくインターネットで意思登録をするという方法もあることを知った。広告を見て多くの人が関心を持ち、臓器移植ネットワークのサイトを訪れれば意思表示をする人も増えるのではないかと考えた。私は学生証にも臓器提供の意思記入欄が設けられたらより良くなると思った。それは自分一人では叶えられないことだが、

- 主催 茨城新聞社 茨城新聞茨城会
後援 文部科学省 茨城県 茨城県教育委員会
協力 茨城県教育研究会 茨城県新聞教育研究会 茨城県学校長会 茨城県高等学校長協会 茨城県PTA連絡協議会 茨城県高等学校PTA連合会 茨城県私学協会
【優秀学校賞】 牛久市立ひたち野うしく中、つくば市立高崎中、牛久市立牛久一、筑西市立開城西小、牛久市立下根中、県立鉾田一高附属中
【学校奨励賞】 鹿嶋市立高松中、牛久市立牛久三、龍ヶ崎市立龍ヶ崎中、県立古河中等教育学校、県立牛久高、県立日立一高附属中、茨城キリスト教学園中、水戸市立内原小

第13回 新聞感想文コンクール

茨城新聞社と茨城新聞を取り扱う新聞販売店で組織する「茨城新聞茨城会」が主催する「第13回新聞感想文コンクール」の4部門の入賞者52人が決まり、表彰式が明日、水戸市千波町のセキショウ・ウェルビーイング福祉会館(県総合福祉会館)で行われる。

この紙面では全入賞者の名前と、最高賞の文部科学大臣賞、茨城県知事賞を受賞した8人の作品を掲載する(敬称略)。

コンクールは子どもたちが新聞を読み、感想を書くことで地域や社会に関心を広げ、読解力や表現力を養うことを目的に毎年開催している。

応募総数は3521点。小学校1～3年の部に81点、小学校4～6年の部に491点、中学生の部に1985点、高校生の部に964点の応募があった。

取り組みが顕著な学校に送られる優秀学校賞には、牛久市立ひたち野うしく中、つくば市立高崎中、牛久市立牛久一、筑西市立関城西小、牛久市立下根中、県立鉾田一高附属中の6校が選ばれた。



第一次審査会の様子(2022年11月14日、水戸市内) ▶

文部科学大臣賞

小学校1～3年生の部



筑西市立関城西小3年

吉田 こころ

このきじは、物と行動のちがいを話して考えています。物と行動をくらべるのちがいを話して考えています。物と行動をくらべるのちがいを話して考えています。物と行動をくらべるのちがいを話して考えています。



中学生の部

自分のペースで一歩ずつ



つくばみらい市立小絹中3年

川上 ひより

「一人ひとりの違いを大切にしよう」というのが私の目標です。自分のペースで一歩ずつ進んでいこうと思います。自分のペースで一歩ずつ進んでいこうと思います。

小さい赤ちゃん成長記録



我が家の赤ちゃんの成長記録です。赤ちゃんの成長記録です。赤ちゃんの成長記録です。赤ちゃんの成長記録です。

高校生の部

「きく」とは何か。



県立牛久高3年

前田 美緒

「きく」とは何か。聞くという行為は、コミュニケーションの重要な要素です。聞くという行為は、コミュニケーションの重要な要素です。

- 入賞者リスト: 文部科学省大臣賞、茨城県教育長賞、茨城新聞茨城会長賞、茨城新聞社社長賞、茨城県知事賞、優秀賞、奨励賞、佳作賞、その他賞。各賞の受賞者名と所属校を記載。